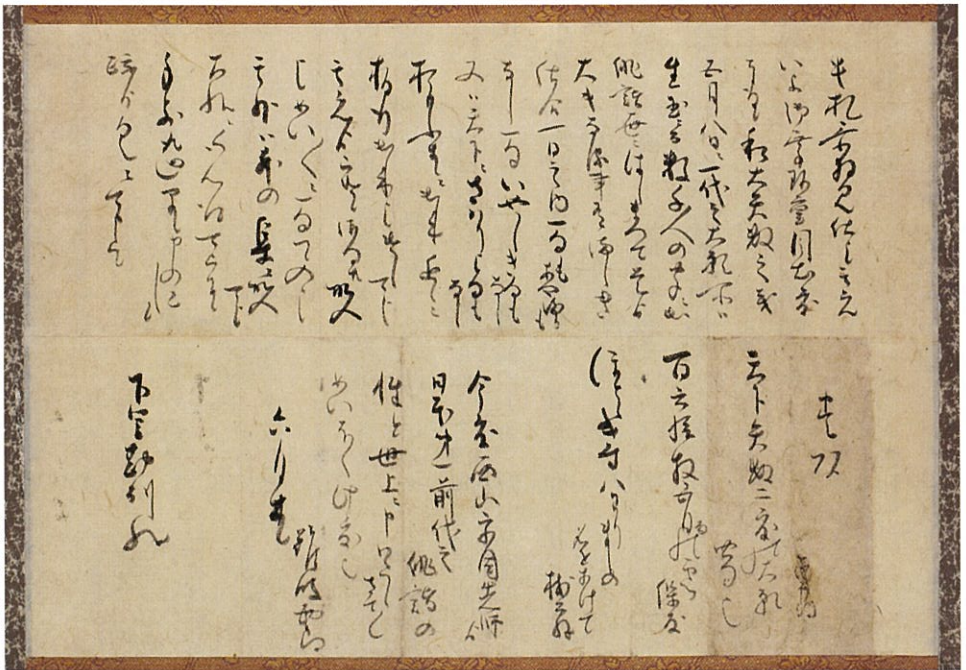


やまとの名品 天理図書館



おお や かずじょうじゆぶみ しもさとかんしゅうあて
大矢数成就文 下里勘州宛

西鶴自筆

延宝八年(1680) 一軸

縦29.0糎 横41.5糎

井原西鶴（一六四二～一六九三）は『好色一代男』等、江戸時代に流行した浮世草子の作者として有名だが、その文学の出發は、浮世草子作家ではなく俳諧師であった。十五歳頃から俳諧を学び、のち新風の談林俳諧の中心人物、西山宗因に師事する。

西鶴は、弓術の通し矢にならい、一昼夜の制限時間内で詠む句の数を競う「矢数俳諧」の創始者で、延宝五年（一六七七）に千六百句の記録を打ち立てた。しかし、同年九月には、月松軒紀子が千八百句、翌々年には大淀三千風が二千八百句と、次々記録は更新された。そこで西鶴

は、再び日本一に返り咲くため、延宝八年（一六八〇）五月七日、大坂生玉神社に数千人の観衆を集め二度目となる矢数俳諧を興行、みごと四千句独吟を成し遂げた。

掲出書は、下里勘州から送られた手紙に対する、四千句の矢数俳諧興行の成功を伝える同年六月二十日付の西鶴の返書。勘州は尾張の酒造家で、俳号を知足と称する西鶴のよき後援者であった。掲出の手紙からは、師の宗因から「日本第一」と、ほめられたことなどを、誇らしげに大喜びする西鶴の様子をうかがうことができる。また、重要な発句「天下矢数二度の大願四



西鶴像『歌仙大坂俳諧師』より

千句也」の「四千句」を「四句」と書き誤るなど、誤字脱字があり、各地から祝賀の手紙が送られてきたのだろうか、あわただしく返事を書く西鶴を思いめぐらすことができ興味深い。後に勘州が手紙を掛軸に仕立て「大矢数成就文」とのタイトルを与えた。

（天理図書館 瀬川浩子）